

# 悠久の河

22

## 再会

「ゆうにも寂しい思いをさせてしまった」流し台の前で襷掛けしたクニの後ろ姿の肩があたりが僅かに震えた。

彌兵衛は火鉢で手を培りながら、今から伝えようとする言葉を胸の奥で反芻していた。「言い出せない。やっぱり、言えない。このことを伝えたら、クニはどうなってしまうのだろう。今のクニには、言つてはいけないのだ。」

彌兵衛は自分自身の心と闘っていた。

そんな時、突然、クニが驚きの声を発した。「旦那さま、仏間でなにやら物音が聞こえます」「声もかけずに家に入つて来るのはいすれ泥棒であろう。間抜けな泥棒であるのお。周藤家の家には盗む物など何も残つてはおらんわ」

彌兵衛は、そう言いながら、ゆっくりと立ち上がつた。

「正月早々、こんな家に入つてきた氣の毒な侵入者に、欲しい物が有つたら、なんでもくれてやろう。」

勘六が周藤家に戻り、家の中にもやつと小さな春の訪れが感じられるようになつた。

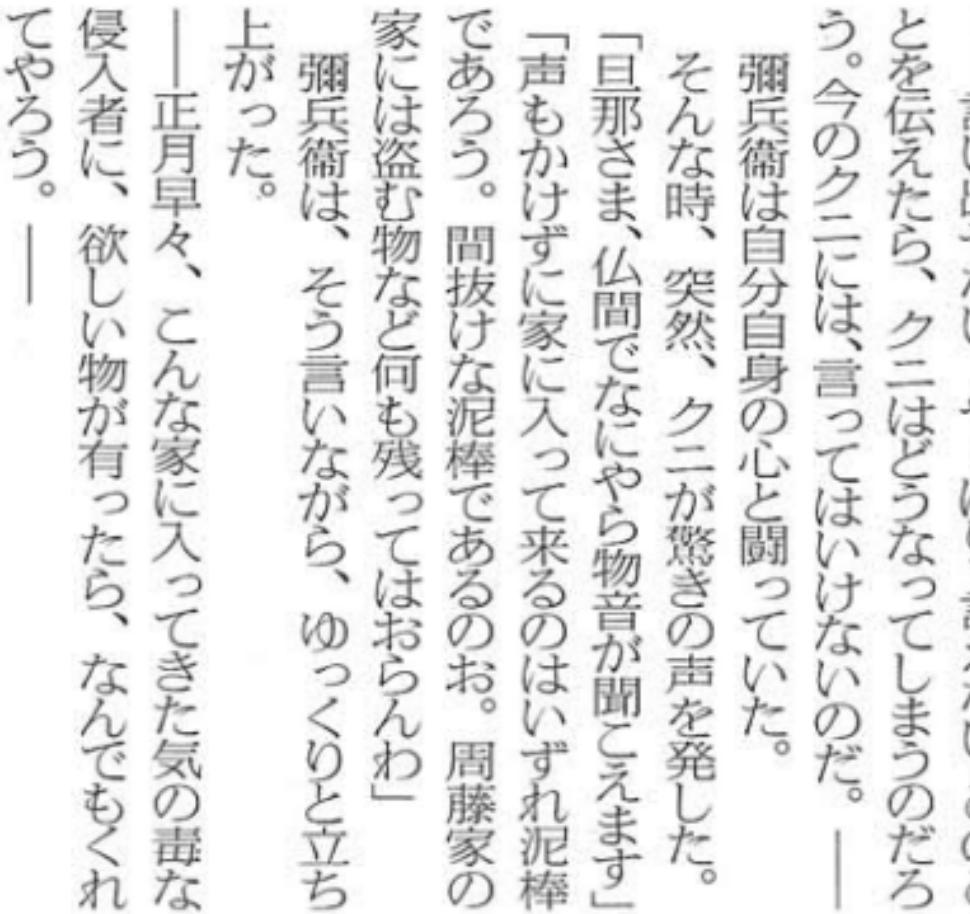
クニの悲しみも、日が経つに連れて少しずつではあるが薄らいで行くように見えた。勘六と五郎太が、笑い声を上げながら、一緒に山の仕事に行くような光景も見られるようになり、村の人々は

「庄屋さんの家も、ようやく落ち着きなさつたなあ」と、尊した。

勘六は、家を出ていた四年半のことを口に出すことは無かつたし、周りの者も強いてそれを聞き出そとはしなかつた。

五郎太は、彌兵衛に耳打ちし、「勘六さまは、ときどき、どこかに通うておられます。いったい、どこへ通うておられるのでしょうか?」

と不安がつたが、彌兵衛は五郎太を諫めた。



村尾 靖子

高田勲